# 仏道ということ

## ――観無量寿経義疏について――

三桐慈海

### 一　はじめに

ただ仏を称せしむること一口もせば、即ち仏道の中に在りて摂す。

この文は善導（六一三―六八一）が著わした観無量寿仏経疏の玄義分の中、第六和会門、第五会通別時意[1]にみられるものである。この「仏道の中にありて摂す」とは、外道で仏名を称する者はいないから、一声でも仏名を称すれば、外道に区別して仏道の域にはいっていることになる、と言っているにすぎないのであろう。しかしこの文の前に、法華経方便品第二の末、いわゆる万善成仏といわれている偈頌より、「もし散乱心に塔廟中に入り、一たび南無仏と称せし、皆已に仏道を成じき」が引用されていることから、「仏道」という語に、何らかの領解されている意味があるのではないかと思うのである。この語は早く道行般若経[2]にも用いられており、仏教や仏法と同義として訳されることもあるようで、竺法護訳・正法華経[3]でも多く見られる。「道」の語にも多義を含み、前後の文脈によってその意味が求められることになって、厳密に把握しにくいこともある。曇鸞は「三界道[4]」を釈す中で、「道は通なり」と説明して、因と果に通ずる意味があると述べる。このように仏道もまた、因果に通ずるの意味があるとするならば、ただ外

道との領域を別けるというだけでなく、如何なる因であれ、仏道の因であるならば、必ず果に通ずる意味があると考えてよいであろう。それでは善導に、どのような仏道があるのであろうか。また別時意趣の中で、何が語られようとするのであろうか。このような課題があるように思われる。

また南北朝時代より隋唐時代までに、多くの観無量寿経疏が著わされたといわれる。その中でも空観によって注釈された吉蔵（五四九―六二三）の観無量寿経義疏は、浄土教とも関りが深いと思われるので、一応その内容をうかがってみよう。

## 二　吉蔵の観経疏

吉蔵の浄土義は、大乗玄論巻第五の教述義の第三[5]に論じられており、それを基本として諸経典の中の、浄土についての注釈がなされていると思われる。その内容については既に明らかにされているところであるが[6]、概略述べてみると、仏土を諸仏菩薩の所栖の域、衆生の帰する所とするから、吉蔵は仏土を衆生教化の場としての世界と捉えている。三論宗義においては、衆生が中道仏性を得ることが仏道の完成であり、真実なるものとして中道仏性を示すことが仏陀応現の本懐であって、あらゆる教法もすべてそのために説かれていると考えるから、浄土もまたその体は中道であるとする。したがって多様な浄土の種々の相は、すべてその用として現わされたものということになる。浄土の三世間では仏の三身に対応して、法身の浄土は中道を体とし、報仏の浄土は七珍を、化身の浄土は対応する色を体とし応現するが、それらはすべて用であるとする。また浄土の相は化主や化処など五種の浄が示されており、その土相は不土をもって体とし、不土であるから土が現わされ、それは空義であるから一切法が成り立つようなものだと説明する。このような考え方は維摩経の仏国品に説かれる心浄土浄の浄土観に、中道仏性義を加えたものであることは明らかである。そしてこの浄土観を基本として諸経に説かれる仏土を、仏土五種と浄土四位にまとめて説明している。

仏土五種とは、浄・不浄・不浄浄・浄不浄・雑土の五種土が、衆生の業感に応じて現わされる報土としてあり、同様に如来によって応現される応土五種が対応されて説明されている。また浄土四位とは、凡聖同居土・大小同住土・独菩薩所住土・諸仏独居土であり、劣より勝へ次第していると言う。また仏土の浄と穢については、それを見るものの業の違いによって浄穢があるので、実際には浄穢の区別などはない。これは中道であって浄穢の二縁によって二土を見るにすぎず、浄と穢は相互に相い妨げることにはならないから、一辺に執してその義味を傷つけることがあってはならないと、旧説を批判するのである。以上が浄土についての通論であるが、別論として西方浄土が五項にわたって述べられている。この中の浄土に声聞ありや否やについては、多く論及されているところであるが、ここでは五項の見解を例挙すると次のようになる。浄土は常住である。三界ではない。声聞はある。人天の名はある。化生であって胎生ではない。応の禽獣はある。これらが基本的な考え方であろう。

具体的な浄土往生の道を示している観無量寿経に、吉蔵もまた註疏を著わしている。吉蔵が考える成仏の道は、無生法忍を得て中道仏性を体得することである。[7] 定善を説く前の経文に阿弥陀仏国土を見ることによって、心に歓喜を生じて無生法忍を得ることが説かれているによって、それを釈して

何れの意か無生法忍を得る。依正と不依正を識るを以て、仮を識り中を悟るが故に、無生法忍を得る。[8]

と述べている。依報と正報とは夢の如く幻の如きものとするならば、依法による正報であり正報による依報であって、別異のものではなく仮施設されたにすぎず、真実には正報でもなく依報でもないことを悟るから、それを無生法忍を得たと言うのである。その場合に経文の散善を説く三輩九品の内において、上品上生[9]は菩提心をおこして修行し、七日を経て彼の仏国に生じて彼の仏身を相見し、妙法が説かれるのを聞いて無生法忍を悟るとある。同じく上品下生では因果を信じ大乗を謗らず、ただ無上道心をおこすことによって、阿弥陀仏の来迎を得て往生し、聞法の三小劫を経た後に、百法明門を得て歓喜地に住すと説く。また下品上生では、衆生が多くの悪業を重ね、大乗経典を誹謗するこ

とはなくとも、造悪に慚愧もない。それでも善知識に遇い仏名を称することによって来迎を得て、経法を聞いて信解し無上道心をおこして、百法明門を具し初地に入ることができるとある。下品下生の不善業をなし五逆十悪を具して受苦無窮の衆生でも、大悲音声をもって諸法実相が説かれるのを聞き、歓喜してすぐに菩提の心をおこすと説かれている。[10] この九輩と無生法忍の関係について、吉蔵は初地無生と七地無生を設定する。すなわちまず上品上生の無生法忍は七地無生とし、その理由を「下品上生は百法明門を生じ歓喜地を得る。下品ですら歓喜を得るのであるから、（上品では）七地無生である[11]」と述べる。これが仏道の因果を信ずる上品下生の百法明門を得て歓喜地に住するのと、衆悪業の下品上生が百法明門を得て初地に入ることを得るとを、両者対応させることによって、上品の三輩が七地無生であるだけでなく、下品にあっても初地における無生法忍を認めていこうとするのである。

「また因果を信じ、大乗を謗ぜず[12]」ということは、吉蔵においては軽い意味ではなかったと思われる。観無量寿経義疏では、無量寿あるいは無量寿仏を所詮の理境とし、その仏陀を覚者と訳して自覚・覚他・覚道満足と説明した後に、仏義三種として正法仏・修成仏・応化仏を挙げる。正法仏は実相法身で体は無相であり、不二正観の平等境智をいう。修成仏は妙行を研修した行満剋成の妙覚の報仏であるが、報の意味を応化とすることもあるという。これは浄土についても言い得ることで、種々の七宝を示すことで応土となり、酬因の報土ではない。吉蔵はこれを「もし所化の修因について往生義に論をなせば、報土となすべし。然して所化は因によって応土中に往生す[13]」と述べている。妙行を行じた酬因の報としての仏土ならば、報土ということになるのであるが、往生の業因によるならば、七珍の応土が依報として認められることになる。これに対して応化仏の化は随縁の迹であるとする。この化を観ずるとは西方浄土の仏を観ずることであり、法蔵菩薩が四十八種の誓願を発して仏土が形成され、その仏土の中に無量寿仏として生じて衆生を化度する、そのありようを観察するということである。これよりするならば吉蔵は化土の無量寿仏と、「無量寿仏者是所観」や「無量寿是所詮之理境」と示される報仏（応化）としての無量寿仏の二面を考えているよう

である。

胡に云う阿弥陀仏陀、此に云う無量寿覚は、無量寿を以て三仏に通ず。何となれば法仏は彼此の辺量はかるべきにあらず、故に強いて無量に名づく。修成仏は寿量虚空に同じきが故に無量寿と云う。応仏無量とは、もし通論門には衆生無量にして垂迹何ぞ盡さん。大経十三願に云うが如し、云何が慈悲を捨てて永く涅槃に入らんと。別論の弥陀は、広大の願、土を造り寿長遠なり。三乗凡夫の測量するあたわず、故に無量と云う。[14]

と述べている。真の無量寿は無量寿という語すらもたず、形もとらないのであるから、法仏も修成仏も覚りとしての真実ではあっても、思慮をもってはかることはできない。しかし応土は仏の衆生救済の慈悲であり、衆生に対応して現われるものとする。そこで観無量寿経の宗と体を論じる中で、無量寿経は広く浄土を明らかにして、略して因行を顕わすのに対して、この経は広く因行を論じて略して浄土を弁じており、浄土の因果を体とし、衆生に勧めて因を修するところの往生を宗とすると述べる。宗と体と区別を見ない吉蔵は、他方では浄土の因果をもって宗としており、三輩九輩を浄土の因、西方無量寿国が果とする。また三輩が無量寿国を観察するのであるから、無量寿が果で観が因となる。吉蔵が経題を説明するのに、観無量寿経が無量寿を観察するという因行のみになるのを嫌って、無量寿観経であると言い、境である無量寿によって観を生じるとしたことは、観によって智を生ずることを目指したことにある。

然して生滅無生滅をまた含む。何となれば穢土の生滅無生滅あるより、穢土の真応の二身を観ず。浄土の生滅無生滅あるより、浄土の二身を観ず。穢土の応身の生滅、真身の無生滅、浄土応身の生滅、真身の無生滅。今この観は乃ちこれ浄土の生滅無生滅の二観なり。[15]

と述べるところに、無量寿仏国の「変易生死の分段生死」とし、「彼の仏寿実には無量にあらず」という意味が示されている。吉蔵が「因果を信じ」ということに、西方浄土の往生の意義を見ていたことは明らかである。

それでは因果を信じない者はどのようになるのであろうか。

解して云く、第三品は悪に三人あるを明かす。初めに十悪をなすを明かす。次に四重をなすを明かす。後に五逆をなすを明かす。謗法闡提を明かさず、故に悪を明かすも盡くさず。十悪四重五逆並びに西方に生ずることを得る。もしこれ謗法闡提ならば生ずることを得ざるなり。謗法闡提の生ずるを得ざる所以は、闡提は法を信ぜず。臨終に無量寿仏あるを説くをなすと雖も、彼れ終に信ぜず、故に往生するを得ず。また謗法もまた爾り。小乗の人の、十方仏あるを説くを聞くも信ぜざるが如きが故に、往生を得ざるなり。[16]

と述べて、因果について信ずるか不信なのかによって、往生と不往生が定まることが示されている。「故に悪を明かすも盡さず」とは、この経典が一闡提や謗法などの不信の者に対して、往生成仏を認めないところに、涅槃経が一闡提の成仏に言及しているのに比べて「盡さず」と述べているのである。観無量寿経は王舎城の悲劇を発端として、西方浄土の観察と往生が説かれているのであるが、その経文には、西方浄土の法門は、韋提希夫人と未来世の一切衆生のために説くとされていること、また仏は韋提希に対して「汝これ凡夫」と示して、仏力によるから彼の清浄国土を見ることができると説かれる。また十六観を説き終った後で、夫人は極楽世界の相と仏身と二菩薩を見ることができ、心に歓喜を生じ、廓然大悟して無生忍を得たとも説かれている。吉蔵もまた「未来世の一切衆生のための故に、この浄業を説く」と説明している。また「如来は方便して、韋提希をして浄土を見ることを得せしむることを明かす」と、凡夫であることを認めている。しかし一方で、阿闍世王が殺父の五逆罪を犯さなければ、この経を説かれることはなく、後に王が悔心をおこして仏の慈悲に遇うこともない。また父王も仏の教化によって阿那含果を証することもなく、韋提希が浄国を見て大悟し無生法忍を得ることもなかったと言う。ここに父王と韋提希と阿闍世王の三者の行為があって、浄土の法門は開かれたと述べ、「ここをもって三聖共に方に開経をなす。故に云う三聖の意趣斉しく深し」と言う。また「念仏の故に釈迦及び無量寿を見ることを得る。これ則ち大利益事の善権方便なり。もししからずんば、この一経を説くことを得るに由しなし」とも述べている。凡夫であるとされた韋提希が、仏力によって無量寿仏とそ

の仏国を見ることができ、無生法忍を得たことによって、浄土往生と成仏の道が開かれたと考えているのである。なお下品の者は善を修さないが、大乗の妙法を聞くことによって、大乗の果を得ることができるが、現在は善を修してなくても過去に発心したことがあって、今大乗を聞いて復た発心することができるのであると、下品人の善弱果強を補っている。

吉蔵が著わした観無量寿経義疏の内容を、概略述べてきたのであるが、その求めるところは無生法忍を得て仏になることであった。無生法忍を得るとは、不生不滅の十二因縁を観察[17]して智を得て、中道仏性を体験することに他ならない。中道仏性を体得することは、仏身を見ることであり、観無量寿経において無量寿を観ずることである。

## 三　善導の別時意趣

冒頭に引用した文は、善導が別時意について述べている一文であったが、この課題についても既に多く論じられていて[18]、あらためて見解を述べるものでもないので、その内容を概略記してみる。真諦訳の摂大乗論[19]には、称仏名による成仏も、発願による往生も、求道者が退堕することのないように、仏によって設定された別時の意趣による説法であると述べられている。成仏の別時意趣とは「人の多宝仏を念ずれば、即ち無上菩提において退堕せざることを得るが如し」とある。同じく摂大乗論釈では、多宝仏の名を誦持するだけで上品の功徳に進もうとする怠惰のものに、怠惰を捨てて道を勤修させようとするためで、ただ仏名を誦するだけで、退堕せずに決定して無上菩提を得るというのではないと述べる。当時、摂論宗などの人により、念仏往生が批判されるにあたって、この別時意趣の説が用いられていた。それに対して善導は、念仏がそのまま悟りではなくても、万行の中の一行である念仏三昧に違いないので、一行とはいっても、生死より成仏に到るまで退没しないと主張する。そこで摂大乗論の称仏は、ただ自ら仏果を得ようとするものであり、経典が説く称仏は外道に簡異するためのものであるという。そこで

然るに外道の中には都て称仏の人なし。ただ仏を称せしむこと一口もすれば、即ち仏道の中に在りて摂す。故にすでにおわるという。

と述べる。仏名を称することは仏道を歩むことであるという。この「仏道」の語には特別な意味があるのではなく、ただ「外道」の語に対応させたものにすぎないのかも知れない。また法華経方便品の偈頌、いわゆる万善成仏の一文「一たび南無仏と称せば、皆すでに仏道を成ず」が引用されていることもあって、「仏道」が使用されたものとも思われる。しかし吉蔵の信不信による往生不往生ということもあって、「仏道の中に在りて摂す」の句が、成仏への一道の意味を含んでいるように思われるのである。

次に往生の別時意趣とは、摂大乗論に「人ただ発願によって安楽土に生ずるが如し」とあり、摂大乗論釈には「この一の金銭を千の金銭の因となすなり。仏名を誦持するも亦た爾り、菩提を退堕せざるの因となるのみ」とある。この論文によって、観無量寿経が説く下品下生の十声称名では往生はできず、遠い将来に往生するための因となるにすぎない。仏は将来の凡夫のために、悪を捨て仏名を称せしめたにすぎない。それを誑言して生ずというが、実には生ずることはできないと、浄土往生の主張を批難する。この批難に対して善導は阿弥陀経の文を引証して、名号を執持すること七日、一心に往生を願う者を護念したまうと述べ、仏の語を信じるべきであって、菩薩の論に執われてはならないと反論する。しかし称仏による往生は、行と願とが具足していなければならないとし、論に記述されている発願のみでは遠生の因にすぎないということは、行については言及されていないのであるから、摂大乗論等の説述が誤ってはいないと認めている。そこで観無量寿経の中の十声称仏を、十願十行として具足しているとして、六字の名号の解釈をしている。それは

南無と言うは即ち帰命なり、またこれ発願廻向の義なり。阿弥陀仏と言うは、即ちこれその行なり。この義をもっての故に必ず往生を得と。

という。帰命とは自らの生活行動をそちらへ差し向けること。発願廻向の意義は、玄義分冒頭の勧衆偈に示されているのであり、浄土往生の願いをおこし称名念仏する願生心である。仏名は行であるとする。玄義分の第二釈名では六字の釈がなされて、阿弥陀仏は法と人をそなえた所観の境であり、正報と依報が真と仮によって現わされたものと説明する。それは無量寿経に説かれるように、法蔵菩薩が四十八種の誓願を立て、その誓願成就の相としての、本願維持力による阿弥陀仏国が示されている。その正依二報は迷妄の衆生を仏国に往生させようとする、仏の慈悲行が現われたものである。それを「ほぼ彼の方の清浄の二報の種種の荘厳を見て、以て昏惑を除く。障を除くに由るが故に、彼の真実の境相を見ることを得る」と述べている。また所観の境ということは、能観の照がなければならない。それを「常に浄信心の手を以て、以て智慧の輝きを持ちて、彼の弥陀の正依等の事を照らす」と述べているから、仏智の光に照らされて明瞭になった正依二報の浄土を、衆生は願生心をもって観察し称名することになる。

論の別時意趣の文を、あらためてここでは正報と依報を表わしたものとし、正報はのぞみ難いが、依報は求めやすく、それは辺地の者が中央の徳化を慕って帰化することは容易であるが、その主となることは困難であるごとくに、一行や一願のみでは往生はできなくても、浄土に往生を願う者は帰化を願う投化の衆生のように往生できると、願生者の位置づけを明らかにする。その上でこの生を尽くして涅槃に入ることも、十念称仏することも、すべての行道はみな仏の願力によるものであるから、仏の願力によるのであれば、皆往生できないはずはないと主張するのである。「我れ信外の軽毛」と自らを凡夫の立場においた善導は、一口でも仏名を称すれば、それは外道ではなく仏道の中にあると、外道と簡別することによって、仏道を歩む者の道筋を明確にした。本来、仏道の目的は自らが仏陀となることのはずであるが、善導は浄土に往生しさえすれば、自らに仏陀となるのであるから、先ずは仏の願力が最も明瞭に説かれている、西方の阿弥陀仏国への往生を目指したと思われる。成仏が確実ならば、浄土往生のみが期されたとしても差し支えないので、それも皆悉往生の仏願力に支えられているのであるから、ただ投化の衆生でさえあればよい。

したがって願行具足の十声称仏であれば、浄土往生は確信し得ることとなったのである。この別時意が課題にされているのは、玄義分の「第六、経論の相違を和会し、広く問答を施して疑情を釈去す」の中であるが、ここでは観無量寿経に説かれる三輩九品について、諸師の異見を批難してすべて凡夫であると主張する。それは上品は大乗に遇う凡夫、中品は小乗に遇う凡夫、下品は悪に遇う凡夫であり、殊に下品は「悪業をもっての故に、終りに臨んで善を藉り、仏の願力に乗じて乃ち往生を得る」という。そこでこの経文をもって経証とするのであるが、「如来今は、韋提希および未来世の一切衆生をして、西方極楽世界を観ぜしめん。仏力をもっての故に、当に彼の清浄国土を見ることを得るべし。」の文を重視して、「未来世一切衆生」のための教えであることを強調し、「如来、この十六観の法を説きたまうは、ただ常没の衆生のためにして、大小の聖のためにせざるということを証明す」と述べている。これは善導が、経文の中で濁悪不善にして五苦に逼められ、煩悩の賊に害せられている未来世の一切衆生ということを、自分の上に見ることによって、また自らの未来世において眺めることで、どのように成仏の道を求めていくかを、常に注目してきたことによると考えられる。浄土における成仏が明瞭になり、仏願力による浄土への往生が確認されたならば、そこには如何にして現世を生きていくか、ということのみが重大な課題となるであろう。釈迦の発遣と弥陀の召換は、経文に証記されているところであるから、「信を取らんとして疑いを懐けば、かならず聖教を引き来たりて明かし、聞かん者をして方に能く惑を遣らしめんと欲す」とは、まさしくこの経が善導自身のために説かれたものである、という確信を示したものと思われる。

## 四　道綽の別時意趣

別時意趣については、既に善導の師である道綽（五六二―六四五）の、安楽集巻上の第二大門[20]に取り上げられていて、下品生の人も過去の宿因によって往生できるという主張は、よく知られているところである。その要点を挙げるなら

ば、先ず観経が説く下品生の十念成就は、そのまま往生するというのに対し、摂論はこれを仏の別時意の語であるとしていて、古来より通論家はこの文によって、臨終十念は往生の因とはなっても、すぐに往生を得るということではない、と批判すると述べている。その上で、仏の常途の説法では、先に因を後に果を明かすのが道理であるが、観経の中での一生造悪しての臨終十念の往生は、過去の因については説いてはいない。ただ仏は未来の造悪の徒を引接して、「その臨終に悪を捨て善に帰し、念に乗じて往生せしめんとなり。ここを以てその宿因を隠す」との理解を示す。その上で「明らかに知んぬ、十念成就する者は皆過因ありて虚しからず。若し彼の過去に因なき者は、善知識にすら尚お逢遇すべからず、何に況んや十念にして成就すべけんや」と結び、「即ちこれ経と論と相い扶けて、往生の路通ず。また疑惑することなかれ」と、往生の仏道を明らかにしているのである。安楽集の第三大門の第三には、輪廻無窮について論じられている。[21] 恐らく中国の仏教史の上で、このような輪廻観を示したは、道綽をもってはじめとするのではないかと思うのであるが、「無始劫よりこのかた、此に在りて輪廻無窮にして、身を受くること無数なる」という考え方を示している。この第三大門は易行道を明らかにして、後代に勧めて信を生じ往生を求めさせるものであるが、「かくの如く遠劫よりこのかた、いたずらに生死を受けること今日に至りて、なお凡夫の身となる。何ぞ曾つて思量し傷歎してやまざらんや」と、現世の生を見詰め、「何ぞ難を捨てて易行道に依らざらん」と、仏の願力による往生を勧めている。道綽は現在の自らの存在の中に、過去世より輪廻して積み重ねてきた行業を感得し、未来永劫の迷いの輪廻に思いを致し、どのようにしてその輪廻が、仏道につなげていけるのかを求めて、念仏易行の道を見出したと思われる。ここでは法華経化城諭品に説かれる、大通智勝仏と十六王子の話を引用している。法華経ではこの第十六人目の王子が「我れ釈迦牟尼仏なり」と説き、「その時の所化の無量恒河沙等の衆生は、汝等諸の比丘、及び我が滅度の後の未来世中の声聞の弟子是れなり」[22] と示している。このような経文の説示が、宿世の因による浄土往生を、別時意趣の説明の上に用いたものと考えられる。

道綽は玄中寺において、曇鸞についての碑文を見て、浄土門にはいったと伝えられており、安楽集は曇鸞の著わした浄土論註の文を、多く援引することによって成り立っている。浄土論註の初めに述べられる、難易二道を挙げ、易行道が信仏の因縁により仏願力に乗じて清浄土に往生し、仏力住持して正定聚に入ることは、よく知られていることである。論註では「菩提とはこれ仏道の名なり」と釈し、浄土往生のあり方については、穢土仮名人と浄土の仮名人と、決定して一なるを得ず、決定して異なるを得ずという、空観を通して穢土と浄土を通じさせる。またそれに加えて、性功徳荘厳では、「正道大慈悲、出世善根生」の論偈を釈して、正道は平等の大道、大慈悲は仏道の正因と説明して、「安楽浄土はこの大慈より生ずるが故に」と述べる。[23] この浄土論註巻上の末には、いわゆる八番問答が列挙され、無量寿経の誹謗正法と、観経の下下品について論じられている。この第六番には両者の罪の軽重が取り上げられ、在心と在縁と在決定の三義において、十念往生が述べられる。在心とは、彼の造罪の人は自ら虚妄顛倒の見に依止して生ずるが、此の十念は、善知識の方便安慰を受けて実相法を聞く。在縁とは、彼の造罪人は自ら妄想心に依止し、煩悩虚妄の果報の衆生によって生じ、此の十念者は、無上の信心に依止し、阿弥陀如来の方便荘厳真実清浄無量の功徳の名号に依って生ず。在決定とは、彼の造罪人は有後心と有間心に依止して生ずるが、此の十念は無後心と無間心に依止して生ずという。無後心無間心とは、仏名を念ずる十念が相続して、他縁を交えないことをいうのであるから、一念一念に種々の雑念が起きるのとは異るのであり、この十念が相続する十念の業が成り立つ時、浄土往生の道が開かれることになるのである。曇鸞においても生死凡夫の流転の闇宅という受け止めはあるが、道綽が言うような自らの輪廻無窮の意識は、あまり感じられない。しかし念仏による一道は、既に仏の大慈悲によって開かれており、衆生の念仏によってそれが現わされるという、念仏往生の筋道は明らかにされている。同じく巻下の末に阿耨多羅三藐三菩提を釈するのに、[24] 菩提を道と訳して無上正遍道とし、一道は無碍道なり、無碍は生死即ちこれ涅槃と知るなり、と述べるところにそれを見ることができるであろう。

## 五　まとめ

別時意趣という課題において、道綽は宿因において浄土往生を証認し、善導は願行具足において将来の浄土往生を確かめた。これを別個の考え方とみるのではなくて、道綽の考え方を受けて、その延長上に善導が往生を見たことにおいて、善導における仏道観が確立されたと考えてみたいのである。輪廻転生という考え方は、インドの冥想の文化において起り、仏教が中国に伝えられるとともに、輪廻観も附随して伝えられて、中国人の思考の領域に波紋を拡げかけた。しかし必ずしもそれを受け入れ馴んでいったとは思われず、神滅不滅の論争を起すような、少し的のはずれた受容も行なわれるに至った。輪廻をどのように考えるかについては、種々の問題があるのであろう。しかし禅定の中で輪廻を考えてみるとしたら、過去より未来へと流れる時間は考えられず、禅定の中での今現在のみが基底となるとみられる。今現在という時間の上に過去を観察し、また未来に思いを至すと、過去のあらゆる行為が、今現在を形成していることが観ぜられると即時的に、過去を観察すると全く同じように、未来が現在を形成していると考えることができる。このように時間の流れを、今現在の基点に過去に限りなく溯らせると、未来にも同様に連続がみられ、その過去と未来が今現在を成り立たせていると見ることになる。「無始劫よりこのかた」という道綽の輪廻観は、このような視点において認められるものであろう。今現在の中にあらゆる宿因が見えるということは、曇鸞のいう煩悩虚妄の果報が見えるということになるが、また今浄土往生の教えに遇い得たことは、過去に仏の教えに出遇っていた、その宿因をも思わざるを得なかったに違いない。あるいは道綽が玄中寺において、浄土の法門に遇い得た感慨が、宿因による十念往生を確信させるに至ったとも考えられる。

道綽に師事した善導にあっては、宿因説では今現在の中に、虚妄の果報と仏縁の宿因との二面が同時に見えることになり、無碍の一道としての法門とは言えなくなる。したがって将来における往生の確実性がなければならなかった。

仏の願力と願行具足の十念念仏によって、確かに浄土に往生し得るとの確信が、経文によって得られたとき、今現在なすべきことが明らかに定まったと感得しえたものと考えられる。ここに迷妄流転の輪廻無窮は、無碍一道の仏道に転換し得たと言い得るであろう。

これら浄土教諸師と吉蔵の観無量寿経義疏との関りについては、十分な検討をなし得なかった。しかし善導の観経疏の中には、吉蔵の解釈と共通するものが見られるように思う。この点を今後の課題としてみたいのである。

註

① 観無量寿仏経疏巻第一（大正37・249c）「答曰、論中称仏、唯欲自成仏果。経中称仏、為簡異九十五種外道。然外道之中、都無称仏之人。但使称仏一口、即在仏道中摂、故言已竟。」

② 道行般若経巻第二・支婁迦讖訳（大正8・437b）「皆使行仏道、已信入仏道、学仏道心已生。」

③ 中村元編「仏教語大辞典」〔ぶつどう〕参照。

④ 無量寿経優婆提舎願生偈註巻上（大正40・828a）「勝過三界道。道者通也。以如此因、得如此果。以如此果、酬如此因。通因至果、通果酬因、故名為道」

⑤ 大乗玄論巻第五、浄土義（大正45・67a）

⑥ 望月信亨著「中国浄土教理史」など、多くの浄土教史に従来ほとんど言及されている。

⑦ 拙稿「吉蔵の注疏にみられる宗教的課題」（仏教学セミナー第26号34頁）参照。

⑧ 観無量寿経義疏（大正37・243a）

⑨ 右同（大正37・244c）

⑩ 観無量寿経（大正12・345c）

⑪ 観無量寿経義疏（大正37・244c）

⑫ 「第三、明上品下生、此人亦信因果、不謗大乗。」（右同）

⑬ 右同（大正37・235b）

⑭ 右同（大正37・234ｂ）

⑮ 右同（大正37・238ｂ）

⑯ 右同（大正37・245ｂ）

⑰ 「論云、前於声聞法中、説生滅十二因縁。次為久習行堪受深法者、説不生不滅十二因縁。如来説之於前、論主釈之。於初二十五品、釈不生不滅大乗観。（大正37・238ａ）

⑱ 「善導の別時意会通について――曇鸞と関連して――」（藤原幸章著・善導浄土教の研究・法蔵館）参照。

⑲ 摂大乗論・真諦訳（大正31・121ｂ）同じく攝大乗論釈（同194ｂ）

⑳ 安楽集巻上・第二大門（大正47・10ａ）

㉑ 右同。第三大門（同12ｃ）

㉒ 妙法蓮華経巻二・化城諭品（大正9・25ｃ）

㉓ 無量寿経優婆提舎願生偈巻上（大正40・828ｃ、同じく834ｃ）

㉔ 「道者無碍道也。」同巻下（同843ｃ）